

令和元年6月24日現在

機関番号：34431

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03243

研究課題名(和文) 現行学校教育における「伝統」文化の分析及び活用の可能性についての総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive study into the potential for analysis and use of traditional culture in current school education

研究代表者

高木 史人 (Takagi, Fumito)

関西福祉科学大学・教育学部・教授

研究者番号：70329845

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：2006年の教育基本法改正において、教育目標に伝統文化を尊重することが掲げられた。本研究は、最近の学校教育における伝統文化教育の在り方について、民俗学・日本文学等からの知見を教育の中にどのように取り込むべきかを取り上げた。特に2016年12月に行ったシンポジウムでは、国語科、社会科、道徳等での昔話や説話・民俗が、伝統文化の文脈から取り上げられながら、改変されている事例を指摘し、これらを是正する必要があると論じた。それ以後は、研究代表者・研究分担者各自の論文や発表などでの活動となった。なお本研究期間後の2019年8月には日本国語教育学会で昔話を活用した幼小連携活動についての企画が進行中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

小学校・中学校の普通教育において用いられている教科用図書における伝統文化教材、たとえば国語科第1学年・第2学年では「昔話や神話・伝承」を教材として使用されているが、それらの取り上げ方が口承文芸の知見を無視しており、近代的解釈に則っていることや、道徳の教材で使用されている偉人説話が歴史的事実に基づいていないこと等を研究の結果明らかにした。そこから見えてくるのは、「伝統」という言葉が持っている曖昧さである。その曖昧さを逆手に取って、これらの教材を活用して、「主体的・対話的で深い学び」「総合的な学習」へと導く可能性があるのではないかと指摘した。

研究成果の概要(英文)：In the 2006 amendment of the Basic Act on Education, respect for traditional culture was indicated as an objective of education. In connection with approaches to traditional culture education in recent school education, this research examines how to incorporate knowledge from sources such as ethnology and Japanese literature in an educational context. In particular, at a symposium held in December 2016, cases were pointed out where changes have been made in old tales, folk tales, and folklore in subjects such as Japanese language, social studies, and morality, while treating them from the context of traditional culture, and the need to correctly present these materials was discussed. Since then, the principal researcher and members of the research team have been active with their own papers, presentations, and other work.

研究分野：口承文学、民俗学、日本文学、国語科教育

キーワード：昔話 神話 伝説 伝統文化 創られた伝統 主体的・対話的で深い学び 総合的な学習 学校教育

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

2006年度に改正された教育基本法では「教育の目標」を定めた第二条第五項に「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度をやしなうこと」の項目が加えられた。それにより、その後の小中高の学校教育の具体的な内容を定めた学習指導要領においてこれらを教育することが示され、また教科用図書においてもこれらの教材が採用されることとなった。しかしこれら教育目標、内容あるいは教材等の変化等は、実際にどのような形で行われ、また、それらが現在の伝統文化研究とどのように関わり合っているのかを具体的に検討する作業は緒についたばかりであるといえる。本研究では、民俗学、日本文学、文化人類学、教育学等の研究者が共同して、これらの問題群に向き合う必要があると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、前述の研究当初の背景に述べたような状況を踏まえて、学校教育においていわゆる伝統文化がどのように教材として存在し、それらが授業の中に活用され、またそれらがどのように児童・生徒に影響を与えているか、あるいは与えられる可能性があるかの追究を考えた。それにより、現行の伝統文化研究の持つ問題点を明確化し、問題点が現れた場合にはどのような対策があるのかを論じようとした。

### 3. 研究の方法

研究の方法は、(1) フィールドワーク (2) 文庫調査を基本とした。しかし、そのどちらに偏るといえることはないように全体として配慮した。また、「伝統」という言葉がどのような歴史的経過を辿った言葉であるかを語彙の歴史として解明することを目論んだ。

### 4. 研究成果

たとえば、第71回日本口承文芸学会研究例会（2016年12月3日、於・関西福祉科学大学）でのシンポジウム「現在の学校教育における「伝統文化」教育の位相を問う—教科書教材・授業実践の事例などを通して—」を次のとおり開催した。

内容は概ね次のとおりである。

#### (1) 「平成18年度改正教育基本法に掲げられた教育目標「伝統文化」と教科書教材の推移」 高木史人

2006（平成18）年12月に「改正」された教育基本法では、第2条「教育の目的」の第5項において、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と定められた。2008（平成20）年に学習指導要領が改訂。国語科では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が定められた。例えば小学校第一・第二学年では「(ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」と記載。それは教科用図書（教科書）の教材に直ちに反映されたが、そこでは次のような問題が現れていた。

第一に、「聴く」ことの重要性（口承性）が等閑に付されていたことである。すなわち、口承文芸の「昔話」を「読み聞かせを聞く」ものとして扱っていた。たとえば、光村図書1年国語教科書に収められた「むかしばなしがいっぱい」の場合では「ほんはともだち」の副題があり、読書教材の扱いとわかる。「聴く」ことを学ぶという側面が欠落しているのである。

第二に、口承文芸の系統性や用語の定義、ジャンルの区別などの基礎的研究に対する理解が乏しい。たとえば光村図書の教科用図書こくご1年上に収録されている「おむすびころりん」では、よいおじいさんしか出てこないが伝承の昔話「鼠浄土」では、160例中「おむすびころりん」と同様の展開を持つ話は7例に過ぎない。

また、同1年下に収録されている「まのいいりょうし」は、稲田和子・筒井悦子の再話であるが、原話は佐々木徳夫『むがすむがすあつとこに』に収録されているが、主人公の「百一さん」について、佐々木は熊谷喜代次という1950年ころに亡くなった実在の人物であることを報告していた。つまり、この話は「昔話」でなく「世間話」なのである。また、教材「まのいいりょうし」の語り収めの句「これで、いちごさけた」は、関東から中部にかけての昔話の語り収めであり、この話の原話を伝える宮城県では用いられておらず、伝統的な言語文化という実態を反映していないと報告した。

また第三に、読書単元「むかしばなしがいっぱい」には、19の話が含まれた挿絵が掲載されているが、柳田國男の分類（『日本昔話名彙』1948、日本放送出版協会）によって区分してみると、

1. 雪女…なし（→『日本昔話事典』では「世間話」に分類されている）
2. かさこ地蔵…財宝発見（完形昔話）
3. うり子姫…誕生と奇端（完形昔話）
4. さるかに合戦…鳥獣草木譚（派生昔話）
5. 力太郎…誕生と奇端（完形昔話）
6. 舌切雀…動物の援助（完形昔話）
7. ねずみの相撲…なし（稀少な話柄で代表的な昔話とはいえない）
8. わらしべ長者…財宝発見（完形昔話）
9. 花さかじいさん…動物の援助（完形昔話）
10. かちかち山…鳥獣草木譚（派生昔話）
11. 三年寝太郎…なし（誕生と奇端にモチーフ）（完形昔話）
12. ぶんぶく茶釜…動物の援助（完形昔話）
13. 聴き耳頭巾…動物の援助（完形昔話）
14. 桃太郎…誕生と奇端（完形昔話）
15. 金太郎…なし（伝説）
16. 鶴の恩返し…幸福なる婚姻（完形昔話）
17. 浦島太郎…な

し(『日本昔話事典』では「伝説」に分類されている)/18. かぐや姫…なし(cf. 誕生と奇端「竹の子童子」、昔話というよりも「物語文学」)/19. 天狗の隠れみの…知恵の働き(完形昔話)

代表的な昔話のセレクションと呼ぶには、偏りのある選択である。誕生ものが多く、『雪女』『金太郎』『浦島太郎』のように、昔話的でないものも含まれている。

16『鶴の恩返し』の挿絵にも注目したい。原話は「幸福なる婚姻」に分類される『鶴女房』であるが、現行版の教師用指導書は、この話に「通婚忌避」の思想(差別意識)を指摘する説を紹介することで「取扱注意」を指示。教科書ではこれに依拠したと思われる挿絵の改変を行っている。旧版では鶴を見送っている青年の絵であったものが、老夫婦の絵に変えられている。このような恣意的操作が、はたして传统文化の尊重に結びつくのか、疑問である。

第四に、「主体的・対話的で深い学び」に基づいて辞書の活用を促す傾向が強いが、学習用国語辞典の代表的な五冊によって「昔話」「伝承」「神話」「説話」「ものがたり」「伝統」などの語義を比較してみると、曖昧で厳密さに不足する説明が多いことが浮彫りになった。

これらから、口承文芸研究が蓄積してきた研究成果が教育現場や教科用図書に反映されていない現状があるが、このような状況を生み出してきた原因には、研究者の私にも責任がある。研究者も一つのメディアであり、社会に成果を発信し、定着させていく責任を担っている。今後の対応が迫られよう。

(2)「小学校国語教科書における中国昔話について」 立石展大

光村図書の教科用図書こくご1年下「むかしばなしがいっぱい」の單元には、外国編もあるが、象徴的な特徴は、東洋の昔話が見当たらず、特に中国の昔話は皆無である。この傾向は、他社も同様である。かつては日本書籍、東京書籍、教育出版の教科用図書において、1973年以降2004年までに中国の昔話が5編取り上げられていたが、現在は見当たらない。

さて、その5編とは、①「ウスマン爺さん」ウズベク族、②「チワンのにしき」チワン族、③「笛をふく岩」リー族、④「太陽を探しに」チワン族、⑤「アーファンティ物語」ウィグル族である。しかし、これらはすべて中国の全人口の8パーセントを占める54の少数民族の昔話から採られている。再話者は、「アーファンティ物語」の中由美子をのぞき、他は民族学者の君島久子である。

この中から『ふえをふく岩』(原本はポプラ社刊の絵本)を例に、原典(採録記録)と本文との比較を試みる。原典『笛笛石』は、『椰姑娘』(1955上海文化出版局)所収の資料であった。

比較してわかることは以下の通りである。

ア、主人公の笛吹きをクローズアップしている。原話では母親の役割が大きいですが、再話ではほぼカットされている。その結果、主人公の笛吹きの存在感が高まることになっている。

イ、特に前半部の話を簡略化している。準主人公の母親についての記述を圧縮している。住居や生活の描写、枝葉の人物、笛つくりのいきさつなども簡潔にされている。

ウ、神秘性を強調している。例えば、キーマンである不思議な老翁が立ち去る場面。原話は「去る」とだけ記述されているが、再話は「ふっと消える」と描写される。あるいは、貝殻から娘が現れる場面では、原話は笛吹きが貝を刀でこじ開けるのに対して、再話は「ふしぎ、貝がぱっと開いて」と表現される。

エ、笛吹きの心理と行動を強調している。「かわいそうに思いました」「喜びました」などの心情描写を加筆し、笛の音で波を押し返す物語の山場では「ピュー、ピュー、ピュー。笛吹きは休まずに吹き続けました」の行動描写を加筆している。

これらの結果、限られた字数の中で、話が明確に子どもに伝わるようになっていく。準主人公である母親を描かず、本筋に関わらない箇所や人物を省略する一方、クライマックスはほぼ原話どおり丁寧に、より効果的に描いていく。主人公の輪郭やストーリーを、聞き手により明確にイメージさせるよう配慮された、優れた再話だといえる。

しかし一方において、教科書指導書(教育出版 1979)の記述には疑問が多い。第一に、本作を「子どもが初めて出会う中国民話教材」と大雑把にとらえ、「異国的情景の中で展開する不思議な話」「主人公の行動と心情の変化が明確に表現されており～人間的感情を3年生なりに読み取り、はぐくむのに適している」とあるが、実際には本文に情景描写や心情描写がほとんどなく、挿絵がなければ日本の昔話として通用するほど、異国性は感じられない。それというのも、本来昔話は情景や心情をくわしく語らないのが基本だからである。ところが指導書では、数行の説明の中に「心情」「感情」「気持ち」という言葉を5回も使って、心情の読み取りを授業の中心とするよう誘導していると感じられる。指導の都合に合わせた、無理のある記述と言えよう。

(3)「小学校国語教科書におけるヨーロッパ昔話について」 久保華誉

光村図書版1年教科書「むかしばなしがいっぱい」の單元、外国編において描かれている「昔話」は次のとおりである。

- ドイツ…「ブレーメンの音楽隊」「ヘンゼルとグレーテル」「ハメルンの笛吹き」「オオカミと七匹のこやぎ」「白雪姫」「ラプンツェル」「金のガチョウ」
- フランス…「長靴をはいた猫」「眠り姫」「シンデレラ」
- ドイツかフランス…「赤ずきん」
- イギリス…「ジャックの豆の木」「三匹の子豚」
- ロシア…「三匹のくま」

- 古代ギリシャ(イソップ)…「ウサギとカメ」「北風と太陽」
- アラブ地方…「アラジンと魔法のランプ」
- 昔話ではなく創作作品…「青い鳥」(メーテルリンク)「裸の王様」「みにくいアヒルの子」「親指姫」「人魚姫」(アンデルセン)

一見して明白のように、昔話の分布がヨーロッパに偏っている。中には複数の国に流布しているものもあるが、タイトルによって国名はほぼ特定できよう(「眠り姫」はフランス、「いばら姫」のように)。ヨーロッパ圏以外は、アラブ圏の「アラジンと魔法のランプ」のみである。アジア、アフリカ、オセアニア、北アメリカ、南アメリカの昔話について、一切のしょうかいがなされていない。これを教育基本法第2条「教育の目的」第5項の他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」の文脈の中でどのように位置づけたらよいか、考えさせられる事例である。

また、昔話伝承(伝統)に拠らない創作作品(児童文学)が「むかしばなし」として5編も含まれており、ジャンルの混乱がそのまま通ってしまう現実が見て取れる。

それにしても、このように地域に偏った「昔話」が教科書に選ばれているのはなぜだろうか。理由は、脱亜入欧の趣のあった明治期の教育に求められよう。すなわち明治期には、教科書・読本、修身教材、英語教材としてイソップ寓話、グリム童話、ペローの「シンデレラ」等が盛んに使用されていた。当時、教育界では、ドイツのヘルバルトの教育主義が紹介され、それを応用した教育方法が、学校制度の黎明期、影響力を持つに至った。ヘルバルトは段階的に教育を進めていく「四段階の理論」(明瞭(個別の知覚)→連合(表象の連合)→系統(関係・秩序)→方法(応用))を提唱し、教材として昔話が優れていると主張した。そのため、教科書、読本などで、ヨーロッパの昔話がさかんに使用され、やがて人口に膾炙したのである。

当時の文献で辿ってみよう。

明治33年の「修身童話八巻『こぶとり』(開発社)にはグリムを原話とした「おてんばまめ」(原話「墨と豆と薫」)と、その「四段階の理論」に準じた指導法が掲載されている。同叢書は全九巻あり、他にも多くのグリム童話を採用した。その「教授法」では、「応用段階」として、他人の憂を見て、楽しむ者はだれか。他人の憂を楽しむものは、如何なる目に逢うか。…等と解説されていた。

この他、明治30年の尋常小学校教科書、坪内雄蔵(逍遙)『国語読本』(富山房)にはイソップ「鳩と蟻」「ウサギと亀」「オオカミと少年」などを収載していた。また、明治34年の坪内雄蔵『国語読本高等科女子用 巻1』富山房刊には「おしん物語」(シンデレラ)が掲載されていた。当時は教科書以外のメディアからも子どもたちへグリム童話の普及が進んでいた。その後、昭和初期に鈴木棠三が川越女学校において収集した昔話として収集した昔話(『川越地方昔話集』)の中に実はグリム種の昔話が入っていたり、巖谷小波等が読み物として「少年世界」(博文館)に掲載した例も見られた。

それでは、現在の状況はどうかというと、全国で語りのボランティアグループが数多く活動しており、昔話の選択は伝統的な昔話にこだわらず、多様になっている。たとえば、東京都三鷹市で活動している「わたげの会」は、語った話や回数を細密にデータ化している貴重なグループである。会の記録した2001年から2011年のデータを集約すると、昔話の話数も膨大で、採集された地域、国も多岐にわたる。そのなかで、語られた回数が多い昔話を見ると、イラン、ミャンマー、ジャマイカ、スウェーデンなどのものが多い。語った回数、ベストテンの昔話は以下のものであった。

- ①腰折れすずめ…日本※(※印=『おはなしのろうそく』東京子ども図書館刊)
- ②ひな鳥とねこ…ミャンマー※※(※※印=『こども世界の民話』実業之日本社刊)
- ③マメ子と魔もの…イラン※※
- ④ふしぎなたいこ…日本(『ふくろにいれられたおとこのこ』岩波書店)
- ⑤アナンシと五…ジャマイカ※※
- ⑥おいしいおかゆ…ドイツ※
- ⑦三枚のお札…日本※
- ⑧七羽のからす…ドイツ※
- ⑨ねこの家に行った女の子…イタリア(『子どもに語るイタリアの昔話』こぐま社)
- ⑩屋根がチーズでできた家…スウェーデン(『子どもに語る北欧の昔話』こぐま社)

(4)「二宮金次郎の説話と道徳教育」 伊藤利明

紙数の関係で、要点を概略すると、二宮金次郎については歴史的事実と認定されず伝説(伝承)であることが道徳教育の教材として用いられている。道徳教育のために歴史的事実を曲げることは許されるのかが問われた。

(5)「伝統文化」と学校教育の実践—新潟県村上市の場合— 矢野敬一

村上市の「鮭」文化伝統を小学校等の教育現場で児童がどのように受け止めているのかを分析した。その結果、教える立場と児童の受け取り方とは相当な乖離が見られると結論づけられた。

これらのパネル発表の後、薦尾和宏による教科用図書では男女の恋愛を扱うことは現実的には避けられているので、昔話のテーマの中心だと考えられている婚姻譚は教科用図書から排除されていること(『源氏物語』においても恋愛の具体的描写は避けられる等)が紹介され、また、生野金三からは教材「大きなかぶ」の指導法についての提言等があり、フローアを含めて活発

な質疑応答が行われた。(なお、以上のシンポジウム概要を纏めるに当たり、フロアーからの参加者である高山善樹氏の文章を参考にした。ここに謝意を表す。)

この他、論文等は多岐に亙るが、代表的な成果として以上のシンポジウムを紹介しておく。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 16 件)

- ①立石展大、口承三国志の研究、國學院雑誌、117 巻 11 号、2016、374-395
- ②矢野敬一、観光まちづくりの中の「商う芸」—新潟県村上市・酒道楽工藤を事例として—、口承文芸研究、40 号、2017、113-124
- ③伊藤利明、社会科教育法としてのディベート、名古屋経済大学人文科学論集、96 号、2016、1-14
- ④生野金三、実践的指導に向けた「教職実践演習」の研究、人文科学研究 筑波大学、43 号、2016、1-13
- ⑤高木史人、「社会的・共＝競演的でひろい悟り」へのアプローチ—小学校教育史、国語科教育史との係わりから—、口承文芸研究、41 号、2018、125-130
- ⑥葛尾和宏、古文教材偶観、専修大学資格課程年報 パワソアパッソ、20 巻、2018、38-38
- ⑦立石展大、口承三国志の研究 関索と鮑三娘を例として、國學院中国学会報、63 輯、2017、81-101
- ⑧生野金三、主体的・対話的で深い学びの研究—アクティブ・ラーニングの視点から—、人文科学研究会人文科教育研究、44 号、137-145
- ⑨生野金三、総合的な学習の時間の研究、開智国際大学紀要、17 号、2018、95-101
- ⑩高木史人、『赤い鳥』童話と昔話伝承との共＝競演—「それから」「どのように」になったのか—、子どもの文化、50 巻 11 号、2018、56-73
- ⑪高木史人、「昔話」から考える幼小連携—キクちからの涵養を中心に—、月刊国語教育研究、2018、56-57
- ⑫高木史人、野村敬子・杉浦邦子編『老いの輝き 平成語り 山形県真室川町』/坂口簾『鈴と桔梗』、口承文芸研究、42 号、2019、202-206
- ⑬伊藤利明・伊藤由利子、道徳教材としての二宮金次郎論、関西福祉科学大学紀要、22 号、2018、24-34
- ⑭伊藤利明・伊藤由利子、「このとりのゆりかご」を題材にした道徳教材の開発と検討、名古屋経済大学人文科学論集、98 号、2019、21-37
- ⑮生野金三、言葉の育ちを考える、月刊国語教育研究、53 巻 557 号、2018、56-57
- ⑯生野金三、国語科における関連指導の研究 言語能力の育成を志向して(昭和 52 年改訂の学習指導要領を中心に)、開智国際大学紀要、18 号、2019、149-158

〔学会発表〕(計 11 件)

- ①高木史人、採集という連携—昔話採集と昆虫採集と—、日本昔話学会大会、2016
- ②高木史人、展大立石、久保華誉、矢野敬一、伊藤利明、葛尾和宏、生野金三、シンポジウム「現在の学校教育における「伝統文化」教育の位相を問う—教科書教材・授業実践の事例などを通して—」、日本口承文芸学会、2016
- ③立石展大、小学校の国語教科書と語り活動における『英雄の不思議な誕生』—日本における中国の昔話伝承と合わせて—、アジア民間説話学会、2016
- ④立石展大、口承三国志の研究 関索と鮑三娘を例として、國學院大学中国学会、2017
- ⑤立石展大、中国の昔話から 変婆の話を中心として、日本口承文芸学会、2017
- ⑥生野金三、豊かな言語生活を拓く、日本国語教育学会、2017
- ⑦立石展大、小学校国語教科書における中国昔話教材の指導と課題：『ふえをふく岩』を例として、高千穂論叢、53 巻 4 号、2019、1-24
- ⑧葛尾和宏、『今鏡』後三条紀序説—「司召し」を読む—、神戸大学国語国文学会国文論叢、54 号、2019、26-36
- ⑨矢野敬一、平田篤胤から柳田國男へ 問いを共有するオーラルな場と民間学、口承文芸研究、42 号、2019、94-105
- ⑩高木史人、昔話(ムカシ、ムカシバナシ)を「語る」「話す」「聴く」—「昔話」を通して考える幼小連携の方法—、日本国語教育学会、2018
- ⑪高木史人、母と子の民話—関敬吾の原郷から—、日本口承文芸学会、2018

〔図書〕(計 4 件)

- ①高木史人 他、採集という連携—結城次郎から昭和初期の昔話研究と隣接諸科学との関係を問う—、関西福祉科学大学 日本口承文芸学会第 71 回研究例会実行委員会、2016、119
- ②高木史人・立石展大 他、こえとことばの現在 口承文芸の歩みと展望、三弥井書店、2017、335
- ③立石展大 他、中日文化文学比較研究、吉林出版集団、2017、500
- ④生野金三・高木史人・伊藤利明 他、幼稚園・小学校教育の理論と方法、鼎書房、2018、192

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

なし。

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：矢野 敬一

ローマ字氏名：YANO,Keiichi

所属研究機関名：静岡大学

部局名：教育学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：10252157

研究分担者氏名：立石 展大

ローマ字氏名：TATEISHI,Nobuatsu

所属研究機関名：高千穂大学

部局名：人間科学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：20568505

研究分担者氏名：蔦尾和宏

ローマ字氏名：TSUTAO,Kazuhiro

所属研究機関名：専修大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：50510765

研究分担者氏名：伊藤 利明

ローマ字氏名：ITO,Toshiaki

所属研究機関名：関西福祉科学大学

部局名：健康福祉学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：10191884

研究分担者氏名：生野金三

ローマ字氏名：SHONO,Kinzo

所属研究機関名：関西福祉科学大学

部局名：教育学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：10187510

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：なし。

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。